

大塚遺跡群

五十嵐遺跡

昭和59年度発掘調査概報

1984

群馬県吾妻郡中之条町教育委員会

序

昭和57年より開始された団体営大塚地区は場整備事業は、今年度で、3年目を迎える事となりました。

大塚地区は、以前から埋蔵文化財包蔵地として周知されておるところであります。これら大切な文化財を保護・保存し、後世の人々に伝えていくことは、私たちに課せられた任務であります。

今回は場整備により、道水路部分及び削平する部分について記録保存のため発掘調査を実施いたしました。

調査は、平安時代にかけた住居跡、遺物等が発見され、この地域の歴史を解明していくに貴重な資料が多く得られ、ここにその成果の一端を報告いたします。

発掘調査に際して、御指導・ご協力をいただきました関係各位に謝意を表わすと共に、本書が多くの方々にご活用されることを念じて序文といたします。

昭和60年3月

中之条町教育委員会

教育長 塚田 真

例　　言

1. 本書は、中之条町大塚地区は場整備事業に伴ない事前調査された中之条町大塚遺跡群五十嵐遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は中之条町教育委員会が群馬県教育委員会の指導を受け実施した。
3. 発掘調査の期間は、昭和59年6月14日～昭和59年7月26日である。
4. 本書の写真・トレス・編集は丸山公夫が行なった。執筆は、遺物集中区、その他の遺物は綿貫綾子が、出土鉄製品、その他の時代の遺物は大塚昌彦が、その他は丸山が行なった。
5. 遺物整理は、丸山が中心となり行なわれた。
6. 発掘調査・本書作成にあたり、下記の方々の御協力をいただきました。

群馬県教育委員会文化財保護課、中之条町文化財専門委員会、渋川市教育委員会、株式会社調研、井上唯雄、近藤功、栗田栄、大塚昌彦、綿貫綾子、横沢克明、五十嵐信、南雲芳昭、白石典之、大塚美恵子。

目　　次

序	1
例言	1
調査に至るまで	2
道路の立地と周辺の遺跡	2
発掘調査の概要と経過	4
遺構と遺物	4
1号住居跡	4
2号住居跡	6
3号住居跡	9
土坑、焼土遺構、配石墓	13
遺物集中区、その他の遺物	14
出土鉄製品	15
その他の時代の遺物	16
おわりに	17

調査に至るまで

中之条町大塚地区は、昭和57年度より61年度にわたり大規模な土地改良が、中之条町役場農林課及び大塚地区団体営は場整備事業組合により実施されることとなった。

今年度は場整備事業地区は、『群馬県遺跡台帳西毛編II』No.3069に記される縄文時代集落跡の宿割遺跡に近接する地域にあり、群馬県教育委員会文化財保護課によりは場整備事業地区全域を試掘し、五十嵐地区において遺構が確認された。中之条町教育委員会は、群馬県教育委員会の指導をうけ、町農林課に大塚地区は場整備事業予定地内に埋蔵文化財の存在することを通知した。

本遺跡の取り扱いについて町教育委員会は、県教育委員会の指導のもと町農林課との間に協議が行われ、埋蔵文化財を破壊する通路予定地を急遽記録保存のための発掘調査を行うことになった。

中之条町教育委員会は発掘調査を行うにあたり丸山公夫を臨時職員とし、群馬県教育委員会文化財保護課に発掘調査指導を依頼し、同文化財保護主事洞口正史を調査指導者として、昭和59年6月14日より発掘調査を実施することになった。

遺跡の立地と周辺の遺跡

中之条町は群馬県の北西部に位置し、北境において新潟県に接する。東部は小野子山(1201m)に向かって山地が伸び、北部は稲包山(1597.7m)をはじめとする1000m程度の稜線により北縁をなす。西部は木戸山(1732m)他1700m級の山地が連なり幕坂峠(1060m)にかけてしだいに低くなり、南部の吾妻山(1181m)、薬師岳(974m)へとつづき、中之条町中心部をとり囲む屏風のようになっている。南部は吾妻川に沿って盆地がひらける。中之条盆地に流れこむ吾妻川四万川、名久田川流域には数段の河岸段丘の発達がみられ、これらの段丘面は重要な平坦地であり、集落が散在し耕地が広がっている。

遺跡の所在は、中之条町大字大塚1718～1720番地であり、市街地より北東約7km、国道145号線沿い北側にある。地形は、名久田川右岸に発達する河岸段丘面上で、北部は第三紀の山地があり、南部は名久田川を挟み第四紀火山の小野子山がそびえる。名久田川は西南部へ流下し、中之条の段丘平坦面へと注いでいる。本遺跡は、北部の山地から流出する大塚沢の小崩状地面上にあり、南側は名久田川の段丘平坦面につづいている。

本遺跡の周辺には多くの遺跡が知られている。縄文時代の遺跡として本遺跡に近接する(2)宿割遺跡、(3)諏訪原遺跡があり、名久田川対岸には(4)寄居原遺跡、名久田川を流下した右岸山あいに(5)奥山原遺跡がある。弥生時代は、中之条町宮原の(6)法満寺遺跡。古墳時代は、集落跡と思われる(7)長久保遺跡、(8)名久田中学校遺跡、(9)法満寺土師遺跡があり、墳丘として(10)権塚古墳がある。その他江戸時代の水平跡(11)真田水平道路、などの遺跡が『群馬県遺跡台帳』に記されている。台帳に記されている遺跡以外に名久田川両岸の山あいにはいたる所で縄文土器片が採集さ



第1図 大塚遺跡群五十嵐遺跡の立地と周辺の遺跡 縮尺50,000分の1

- 1 五十嵐遺跡 2 宿割遺跡 3 諏訪原遺跡 4 寄居原遺跡 5 奥山原遺跡 6 法満寺遺跡
- 7 長久保遺跡 8 名久田中学校遺跡 9 法満寺土師器遺跡 10 植塚古墳 11 真田水牢遺跡
- 12 伊勢町遺跡 13 平古墳群 14 天代瓦窯遺跡

れる。また中之条駅周辺の町並みは、弥生時代の集落跡と思われる⑫伊勢町遺跡があり後期壺形土器が出土している。植塚古墳に近接して名久田八号墳等の⑬平古墳群が存在する。さらに1982年調査された平安時代窯跡の⑭天代瓦窯遺跡がある。多くの遺跡は工事等による発見や表採として確認されているもので、今後の詳細な調査により多くの遺跡が確認されることは疑いなく、今後の調査が期待される。

発掘調査の概要と経過

本道路は、中之条町大塚地区は場整備事業に先がけて行われた発掘調査である。調査対象は新設予定の道路部分で、調査面積は1200m²である。

調査方法はグリッド方式を採用し、は場整備道路予定地に5mグリッドを設定した。グリッドの主軸は磁北で5°~30° 東偏している。

調査は、昭和59年6月14日より20日前後を予定して開始された。

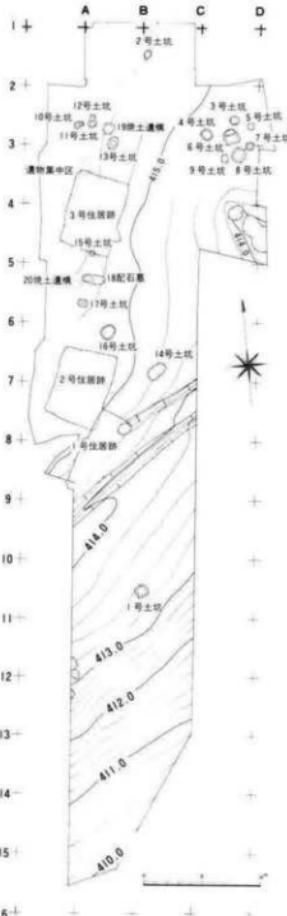
調査に先がけ6月4日より耕作物等の除去、グリッド設定など調査準備を進め、6月14日大塚地区老人クラブの方々の協力を得、開始された。調査はB区より開始され、19日までに集石土坑1基を検出して調査を終了した。次にC区を18日より21日まで行い、最南部の段丘平坦面に軽石層が確認され、軽石除去の結果本区より何ら遺構は検出されなかった。20日より7月26日までA区調査を行い、平安時代の住居跡3軒、土坑16基、焼土造構2基、配石墓1基を検出した。A区確認面において焼土分布が広い範囲に見られ、調査の結果焼失家屋と思われる3号住居跡、また住居跡に近接して焼土造構2基、集石土坑1基、配石墓1基が検出し、調査を難行させた。

本調査により確認された遺構は、平安時代の住居跡3軒、土坑17基、焼土造構2基、配石墓1基、その他地盤沈下跡を検出した。

遺構と遺物

1号住居跡 (第3図)

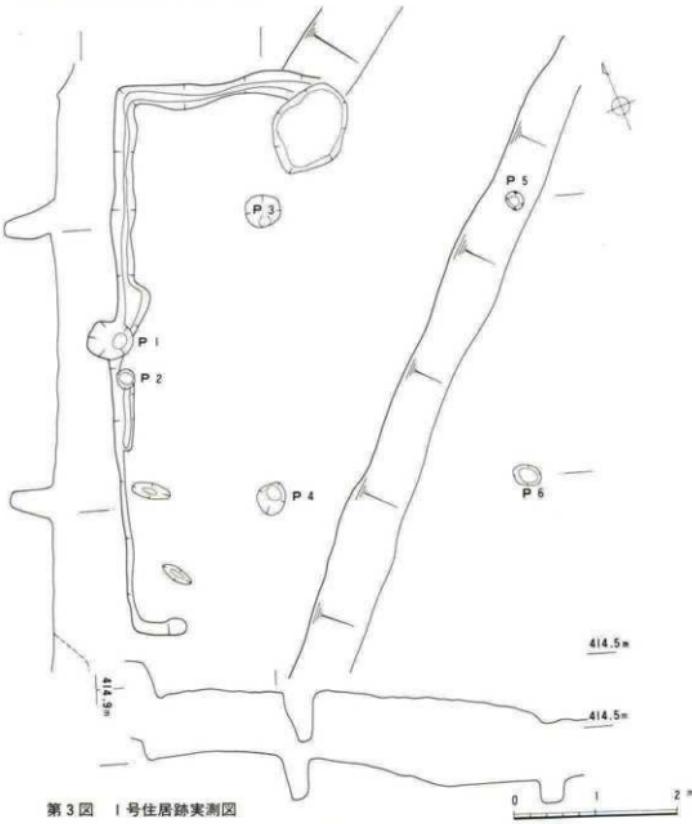
本跡は、A—8・9グリッドに位置する。南東部を溝状造構に切り取られている。平面形は、主柱穴と思われるP3・P4との壁間隔とP5・P6との間隔より隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は南北6.7mを測る。壁残存高は西壁で50cmを測り、約70°で立ち上がる。



第2図 五十嵐遺跡全体図

北壁中央部に皿状の落ちこみを確認した。これは平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 118cm、短軸 80cm、深さ 14cm を測る。また、西壁中央部及び北壁にかけて壁溝を検出した。深さは 2 ~ 3 cm と浅く、幅 7 ~ 18cm である。ピットは 6 本検出され、P 3 ~ P 6 は主柱穴と思われる。それぞれの規模は P 1・長径 57cm、短径 47cm、深さ 54cm。P 2・直径 23cm、深さ 8cm。P 3・直径 42cm、深さ 60cm。P 4・長径 42cm、短径 34cm、深さ 54cm。P 5・直径 23cm、深さ 6cm。P 6・長径 36cm、短径 26cm、深さ 26cm を測る。P 3 ~ P 6 の底部レベルは同位である。カマドは検出されなかった。

出土遺物は何ら検出されなかった。



第3図 1号住居跡実測図

2号住居跡（第4図）

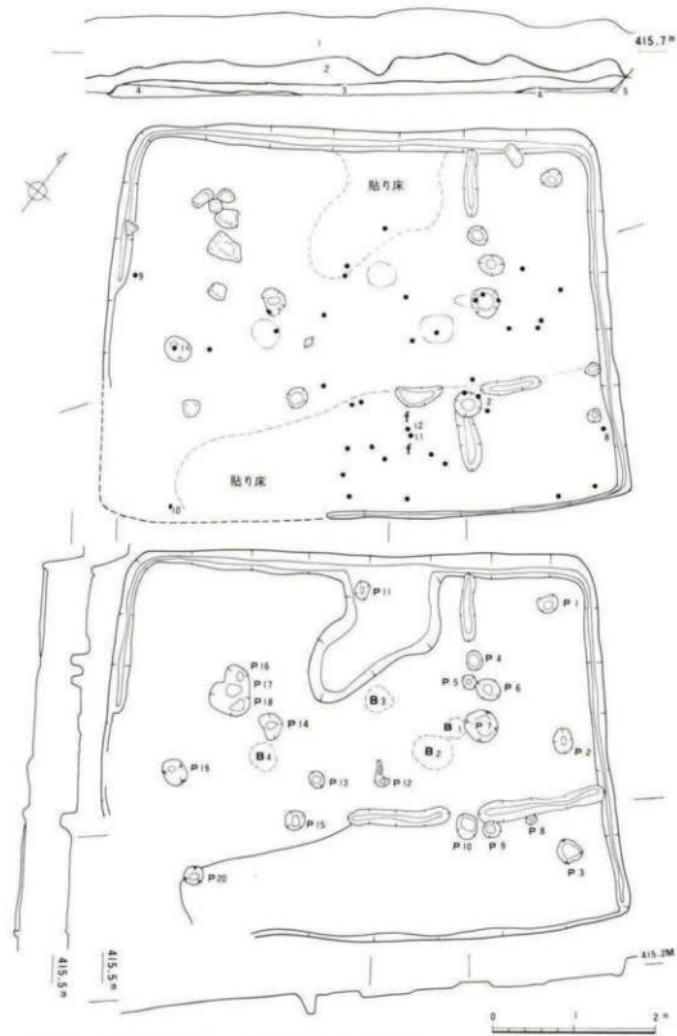
本跡は、A—7・8グリッドに位置する。南コーナー部は1号住居跡と切り合うが、関係覆土が耕作土のため新旧は不明である。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は東西4.77m、南北6.23mを測る。壁残存高は西壁で42cm、北壁で17cmを測る。西・北壁共に約70°で立ち上がる。南壁の東側を除き全壁に甃溝を検出した。深さ2cm、幅16~2cmである。ピットは20本検出された。それぞれの規模はP1 長径24cm、短径21cm、深さ21cm、P2 長径30cm、短径23cm、深さ15cm、P3 直径31cm、深さ16cm、P4 直径21cm、深さ25cm、P5 長径30cm、短径6m、深さ17cm、P6 直径17cm、深さ18cm、P7 直径40cm、深さ6cm、P8 直径13cm、深さ6cm、P9 直径22cm、深さ35cm、P10 長径31cm、短径26cm、深さ21cm、P11 長径24cm、短径16cm、深さ15cm、P12 長径18cm、短径10cm、深さ11cm、P13 直径20cm、深さ10cm、P14 長径32cm、短径26cm、深さ11cm、P15 直径24cm、深さ25cm、P16~18 長径63cm、短径51cm、深さP16 32cm P17 13cm、P18 8cm、P19 長径33cm、短径28cm、深さ26cm、P20 直径24cm、深さ28cmを測る。この内P1・2・3・11・19・20を主柱穴とし、P4・10・14・16を副柱穴と考えられる。床面は南東方向に傾斜し、北壁中央東側より南へ3m、西壁中央北側より東へ85cmの間仕切溝がある。その規模は幅23cm、深さ3cmを呈する。また、西壁中央直下より東側にかけて楕円形状の貼床、北壁からの間仕切溝より東壁にかけて長方形状の貼床が認められた。カマドは検出されなかつたが、床面に4ヵ所の焼土分布が検出された。その規模はB1 直径26cm、B2 長径50cm 短径41cm、B3 直径32cm、B4 直径30cmを測る。なお、B1の分布はP7よりのかき出しによると思われ、P7は炉の可能性がある。

住居跡内の堆積土（第3~6層）に合わせ、本遺跡土層状態を示す。

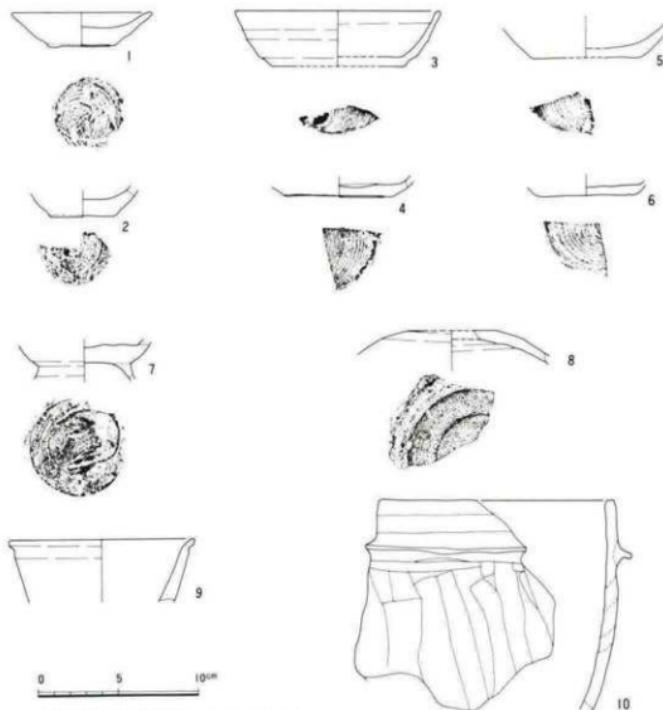
第1層 耕作土。下層は白色軽石が集中。

- 2 暗褐色土。褐色粒子。白色軽石粒子混入。若干炭化粒を含む。粘性、しまり共にもつ。
- 3 暗褐色土。褐色粒子。白色軽石粒子、ローム粒子、炭化粒子を混入、粘性あり。
- 4 暗褐色土。第3層よりローム粒子混入が多く褐色味が強い。しまりも第3層より強い。
- 5 暗褐色土。第4層に比ベローム粒子を多量混入。しまりはあまりない。
- 6 暗褐色土。ロームブロックが非常に多くある。（貼床）

出土遺物は土器、鉄器が出土した。土器は須恵器碎片が多く國化採拓できたものは10点である。1はP19内より検出し、2と同様の土師質甕。3~7は須恵器杯口クロ成形、底部糸切りである。7の高台付は、一部高台剥離により底部調整痕があり高台貼り付けが顕著に知れる。8は須恵器蓋である。9は甕、10羽釜は南コーナー部床面に出土した。鉄製品には鉄鏃2点と鐵治塊形漆3点が検出した。



第4図 2号住居実測図 (上段貼床、下段掘り方)



第5図 2号住居跡出土 土器実測図

辨別番号 団版番号	器 種 類	器高 (cm)	法量 (cm) 口径 底径	出土 位置	器形、成形、調整の特徴	①断土②地成③造有度④色調⑤備考
図5 1 団版3	土器 杯	2.1	8.8 4.2	P19	ロクロ成形。底部で器内厚い。底部右回転系 切り。底端部未調整。小籽で器高極めて浅 い。	①細かい。軽石粒(0.5mm)混入②良好。 サラツ(③)赤橙色④赤褐色より体 部の一帯口縁にかけて吸泥状あり。
図5 2 団版3	土器 杯 (現)	1.5	- 4.0	床面 No.2	ロクロ成形。底部で器内厚い。底部右回転系 切り。底端部未調整。小籽で器高極めて浅 い。	①観。軽石粒(0.5mm)混入②良好、 サラツ(③)1/2④赤褐色
図5 3 団版3	食器 杯	3.5	12.7 8.1	覆土	ロクロ成形。器内には一定。体外部表面クロ 目強い。底部回転系切り。	①細かい②良好、軟質③1/4④灰色
図5 4 団版3	食器 杯 (現)	1.0	- 6.5	覆土	底部回転系切り。	①細かい②良好③底部1/4④灰色

図5 5	須恵器 杯 (現)	2.3	-	6.6	覆土	ロクロ成形、底部回転角切り。	①細かい②良好。秋賀③1/4④乳白色
図5 6	須恵器 杯 (現)	1.1	-	6.1	覆土	底部回転角切り。	①細かい②良好。いよいよ底部1/4④黒褐色⑤底部被反折あり
図5 7	須恵器 高台付杯 (現)	2.3	-	6.1	床面 No.7	ロクロ成形、外周高台接合部十字調整。内面 ロクロ痕強い。底部高台痕強いちるしく。 赤切り痕施者に残る。	①細かい②ややあまい。秋賀底部 み④暗黒灰色
図5 8	須恵器 蓋 (現)	2.0		床面 No.8	ロクロ成形、外周上半部ヘタリすり調整。天 井部に赤切り痕あり。内部ロクロ痕強い。	①細かい②ややあまい。秋賀、ザラツ く③小岐輪④灰褐色	
図5 9	土器 甕 (現)	3.9	11.5	-	床面 No.9	内外面ヘタ調整。器身やや厚く。短かい口株 は若干外反する。	①細かい②良好。しまりあり③口縁部 3/5④暗褐色
図5 10	土器 甕 (現)	13.2	-	-	床面 No.10	紐つくり。口縁部ナヂ。口縁部上段は面どり されている。肩部は小さな断面凸凹状。調下 端部より縦筋のへたけび。内面裏側のナヂ 調整。指印痕あり。現状では直線的。	①砂粒込み。荒くザラつく②ややあまい ③1/8④茶褐色
図版3							

第1表 2号住居跡出土土器観察表

3号住居跡 (第6図)

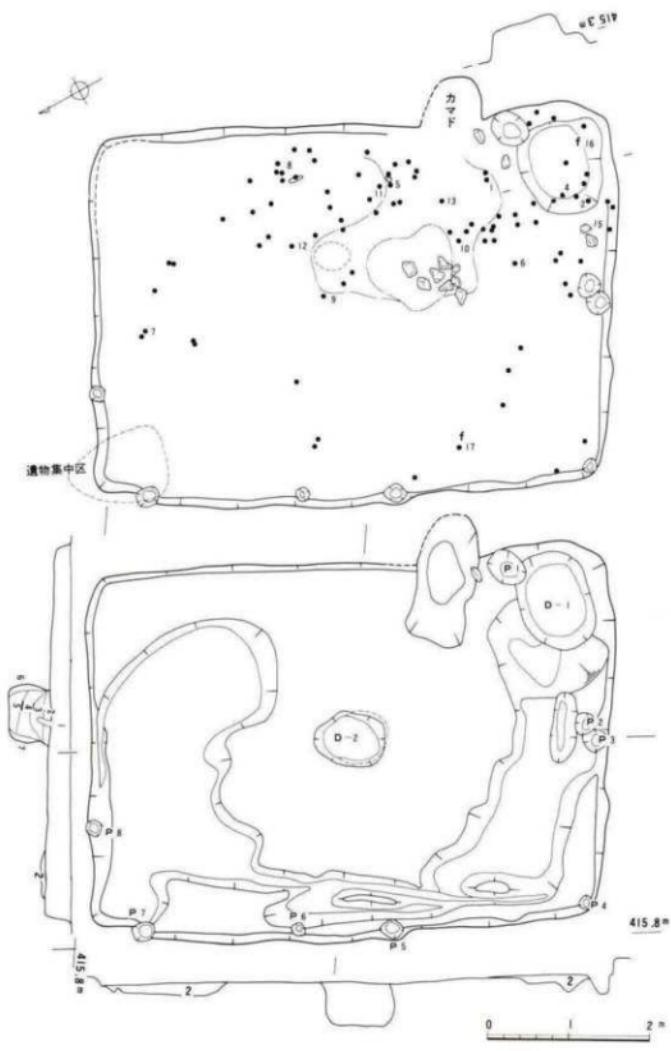
本跡は、A-3・4グリッドに位置する。住居跡の平面形は隅丸長方形を呈し。その規模は南北6.38m、東西4.65mを測る。主軸方位は118°-50°で東偏する。覆土内より多量の炭化物、焼土粒子が中央部から西壁にかけて検出され、特に西壁では長さ60cmの炭化材が出土した。床面はほぼ平坦である。壁残存高は西壁35cm、東壁18cm、北壁9cm、南壁20cmを測る。壁は4壁とも急な立ち上がりである。ピットは8本確認された。規模はP1 長径50cm・短径39cm・深さ61cm、P2 直径28cm・深さ20cm、P3 直径29cm・深さ23cm、P4 直径16cm・深さ16cm、P5 長径28cm・短径23cm・深さ13cm、P6 直径16cm・深さ11cm、P7 直径24cm・深さ22cm、P8 直径19cm・深さ21cmを測る。南コーナーに貯蔵穴(D-1)が確認された。平面形は隅丸長方形で、長軸118cm、短軸102cm、深さ31cmを測る。覆土は暗褐色土(焼土粒子、炭化粒子、白色粘土粒子、褐色粒子を混入。粘性をもつ)である。D-1より須恵器片が出土した。本跡床面全域に貼床が認められ、特に東壁側を除き中央部を取扱むように厚さ15~2cmでロームブロックを混入する暗褐色土の貼床を成す。床面中央部において床下土坑(D-2)が検出され、その規模は長軸85cm、短軸71cmの隅丸長方形で、側面南側でオーバーハングする。床部は平坦である。D-2より遺物は検出されなかった。住居跡内の堆積土は

第1層 黒褐色土 褐色粒子、ローム粒子、白色粒子を混入。炭化物、焼土粒子を多量に混入
しまり若干弱い、粘性あり。

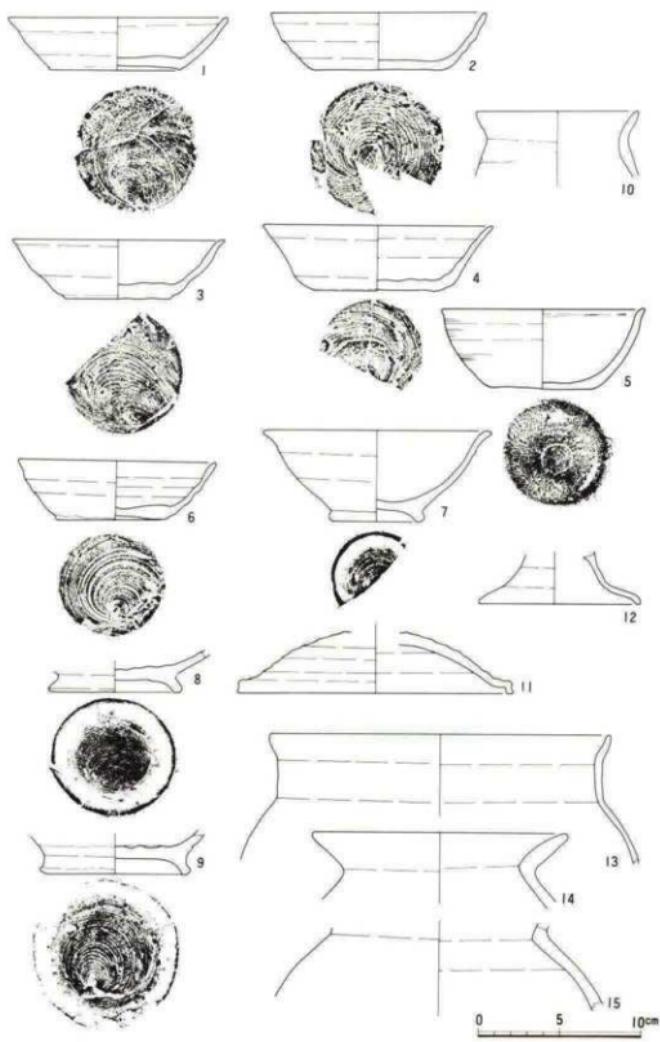
第2層 暗褐色土 ロームブロック混入、しまり非常に強い、貼床層。

第3層 黑褐色土 ローム粒子、白色粒子、灰色粘土粒子混入、しまりややある。

第4層 黑褐色土 ローム粒子を多量に混入し、他に白色粒子、灰色粘土粒子、ローム漸移層



第6図 3号住居跡実測図 (上段貼床、下段掘り方)



第7図 3号住居跡出土土器実測図

ブロックを混入する。しまりあり。

第5層 黒褐色土。ローム粒子、ロームブロック、ローム漸移層ブロックを混入する。

第6層 黒褐色土。ローム粒子を混入。しまりなし。

第7層 黒褐色土。6層同様であるが、黒色味が弱い。

カマドは、東壁南コーナーにより位置する。北側は耕作により削平される。プランは馬蹄形を呈し、東壁を掘り込んで構築される。全長118cm、焚口幅90cmを測り、方位はN-130°-Eを示す。掘り方は床面上より11cm位梢円形に掘り込み、火床としており、約50°の傾斜で煙道部が立ち上る。焼土部は2層あり、上部焼土は2cm位堆積、下部焼土は8cm程堆積する。焚口部右袖に平い安山岩を用い、袖石補強に粘土がある。この粘土は火炎のため堅く、ぱろぱろであった。

検査番号	器種	法算 (cm)	出土位置	器形、成形、調整の特徴	
国版番号 1	須恵器 杯	3.2	13.4	8.0 底面 No.1	ロクロ成形。器内一定。底部右回転系切り。 端部無調整。底部や上止み、見込部の ロクロ目強い。底辺太さと器高が似い。
国版3 2	須恵器 杯	3.6	13.2	7.9 D1	ロクロ成形。器内一定。底部右回転系切り。 見込部ロクロ目強い。
国版3 3	須恵器 杯	3.65	13.4	6.6 底面	ロクロ成形。器内一定。口縁部若干外反。 底部右回転系切り。底辺や小型である に対し。器高若干深い。
国版3 4	須恵器 杯	4.0	14.2	7.6 D1	ロクロ成形。器内一定。口縁部若干外反。 底部右回転系切り。見込部ロクロ目強い。
国版3 5	須恵器 杯	4.8	12.4	6.2 底面 No.5	ロクロ成形。器内一定。底部下部より底部 回転へ削り。内面右斜状の勢き。
国版3 6	須恵器 杯	3.7	12.2	6.7 底面 No.6	ロクロ成形。器内一定。体外部ロクロ目 強い。底部右回転系切り。底面底部無調整。 見込部ロクロ目強い。
国版3 7	須恵器 高台付杯	5.6	14.0	5.8 底面 No.7	ロクロ成形。底部右回転系切り。口縁部外反。 体底部若干外反し、断面右斜形の鋭かい筋 跡付。底部回転系切り。底辺端部ナギ調整。
国版3 8	須恵器 高台付杯 (現)	2.4	-	8.6 底面 No.8	ロクロ成形。底部回転系切り。見込部ロクロ 目強い。「ハ」の字形を大きく広く右斜付。 體部高さ内部ナギ調整。
国版3 9	須恵器 高台付杯 (現)	2.4	-	9.0 底面 No.9	ロクロ成形。底部右回転系切り。端部ナギ 調整。見込部ロクロ目強い。高台斜付ナギ。 體部高さ内部ナギ調整。
国版3 10	土師器 小型甕 (現)	3.9	9.8	- 底面 No.10	口縁部「フ」の字状を呈し。若干外反する。 口縁部内外面撥付ナギ調整。肩部撥付ナギ。 上斜部へナギナギ調整。
国版3 11	土師器 台付甕脚部			底面 No.11	内外部ナギ調整「フ」の字状に広がる。
国版3 12	須恵器 蓋 (現)	3.7	-	16.8 底面 No.12	側面部は直立し。ややふくらみをもって天 井に至る。外面体部下半ロクロ成形。外側 体部上半部回転へナギナギ調整。
国版3 13	土師器 甕 (現)	8.1	21.0	- 底面 No.13	口縁部「フ」の字状を呈し。外側に若干張る。 側面部上半部はへき代工具による浅挂れの 跡があり。口縁部ナギ。肩部撥付及び斜部 のナギ調整。

圆7 14	土器 袋	4.2	15.6	-	床面 No14	口縁部「ア」の字状に強く外傾する。内外部ナ ギ。	①細かい②良好、しまり強い③口縁 部1/2近辺褐色帯口縁芯にすき毛 の付着あり。
圆7 15	土器 袋				床面 No15	ナメ調整。《ひれ部に櫛条状工具によるナ メの跡あり。肩部内面指印跡あり。	①細かい②良好③肩部1/3暗褐色

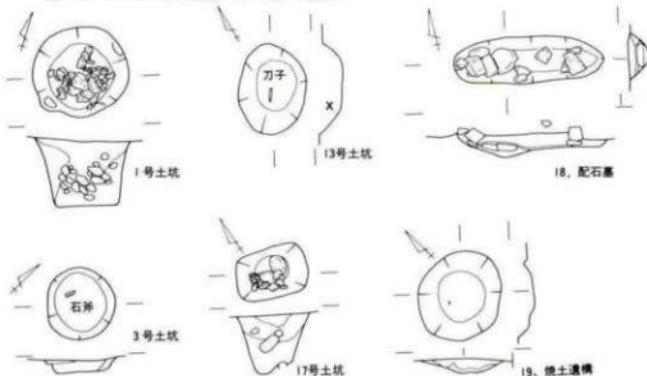
第2表 3号住居跡出土土器観察表

土坑、焼土遺構、配石墓

本遺跡において土坑17基、焼土遺構2基、配石墓1基が確認された。遺構確認面は1~12、14号土坑はローム面、13~15~17号土坑、焼土遺構2基、配石墓は暗褐色土層で検出した。17基の土坑のうち7基は、C-3~4グリッドに集中する。本道跡土坑等について規模・形態を一覧表にし、特異なものについて図化した。

番号	形 平面 断面	規 格 長径 短径 厚さ	位 置 グリッド	出 土 遺 物	考 査	形 平 面 断面		規 格 長径 短径 厚さ		位 置 グリッド	出 土 遺 物	考 査					
						横	縦	横	縦								
1	円	U	118	118	83	B-11				11	円	U	80	61	40	A-3	
2	円	Ⅲ	79	78	14	B-2				12	円	U	42	40	33	A-3	
3	円	Ⅲ	90	84	15	C-3	石原			13	楕	円	Ⅲ	113	82	22	A-3
4	円	Ⅲ	100	94	15	C-3				14	長方形	U	164	90	20	B-7	
5	円	U	56	54	24	C-3	壁2個			15	円	U	79	53	35	A-5	
6	梯形	Ⅲ	137	115	13	C-3				16	楕丸形	Ⅲ	126	110	26	A-7	
7	円	Ⅲ	76	69	30	C-3				17	楕丸形	U	91	59	71	A-6	
8	円	Ⅲ	126	123	30	C-4				18	長椭	Ⅲ	264	57	25	A-6	
9	円	U	72	59	40	C-4				19	円	Ⅲ	103	103	21	A-3	
10	円	U	47	47	5	A-3				20	不明					A-6	
																集石、炭化物混入 配石墓 燒土遺構 燒土遺構	

第3表 土坑、焼土遺構、配石墓 観察表

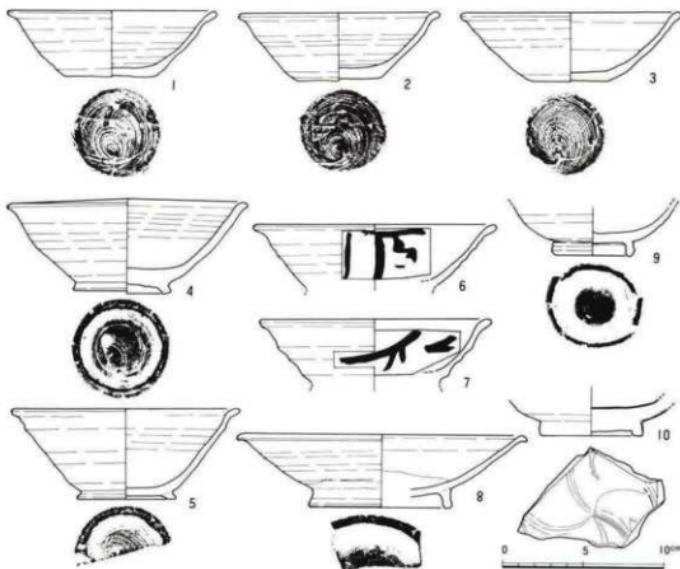


第8図 土坑、焼土遺構、配石墓実測図

遺物集中区、その他の遺物

遺物集中区は、A—4 グリッド、3号住居跡北コーナー部に位置する。平面形は台形状を呈し長軸1.12m。短軸0.9mでレンズ状にあり。3号住居跡床面とのレベル差は12cmを測る。

また、その他の遺物として平安時代のグリッド出土遺物も合わせ記す。



第9図 遺物集中区、その他の遺物実物図

排図番号 図版番号	器種 器形	法量 (cm) 器高 口径 底径	出土 位 置	器形、成形、調整の特徴		
図9 図版4 1	須恵器 杯	4 12.9	5.5	集中区	ロクロ成形。器内には一定。口縁部強く外反。見込部ロクロ目強い。底部右回転糸切り。端部無調整。	①粘土②地成③造有施④色調備考 ⑤細かい。輕石粒(0.5mm)混入⑥ややあまい、軟質⑦2/3⑧白色⑨内外面に吸炭痕あり。
図9 図版4 2	須恵器 杯	4.2 12.4	5.0	集中区	ロクロ成形。器内一定。体部直線的。口縁部強く外反。見込部ロクロ目強い。底部右回転糸切り。	①細かい②良好、軟質③3/4④白色 色⑤内外面吸炭痕あり。
図9 図版4 3	須恵器 杯	4.3 13.5	4.6	集中区	ロクロ成形。器内には一定。口縁部外反。見込部ロクロ目強い。底部右回転糸切り。端部無調整。	①細かい②良好、軟質③5/6欠損 ④灰白色⑤内外面吸炭痕あり。

図9 4 図版4	須恵器 高台付椀	5.8	14.8	6.0	集中区	ロクロ成形。底部器肉厚い。口縁部外反。腰部・高台内外ナデ調整の外極する短い高台。底部回転系切り。	①細かい、小石混入②ややあまい、軟質③定形④白灰色
図9 5 図版5	須恵器 高台付椀	5.5	14.0	6.0	集中区	ロクロ成形。器肉一定。口縁部外反。腰部・高台内側ナデ調整。外極する短い高台。底部回転系切り。	①細かい、軽い②良好、軟質③1／3 ④白灰色、いぶしあり、黒色光沢なし
図9 6 図版4	須恵器 高台付椀	4.0 (現)	15.0	-	集中区	ロクロ成形。器肉一定。口縁部外反。腰部ナデ調整(横位)。外部・外面墨痕あり。質?。	①細かい、かやや運良好。軽くざっくりしている③体部1／3④白灰色
図9 7 図版4	須恵器 高台付椀	4.0 (現)	14.4	-	集中区	ロクロ成形。体部外面ロクロ目強い。口縁部外反。体部内面墨痕あり文字不明。	①細かい、軽い②良好③体部1／3 ④白灰色
図9 8 図版4	灰 燭 陶器椀	4.5	18.0	8.8	表 採	体部への字底に大きく開き、口縁部外反する。高台は高く台脚状を呈する。底部回転ヘラ切り端部ナデ。底部見込部を除き施釉耐毛塗り。	①やや荒い②良好③1／3④いぶし質 灰色
図9 9 図版4	灰 燭 陶器椀	3.0 (現)	-	4.8	A-3	体部下半は丸みをもつ。高台は三日月型を呈するが、様の張りはさほどない。腰部・高台内側ナデ。底部回転ヘラ切り。内面見込部を除き施釉耐毛塗り。	①良好②良好③体部～口縁部欠損 ④白灰色
図9 10 図版4	青磁碗	2.2 (現)	-	6.3	A-5	台脚の厚い高台を有する。釉薬はさほど厚くない。現形で底部を除いて施釉。見込部に片切り、彰花文が施される。	①良好②良好③底部2／3④いぶし質 灰色

第4表 遺物集中区、その他の遺物観察表

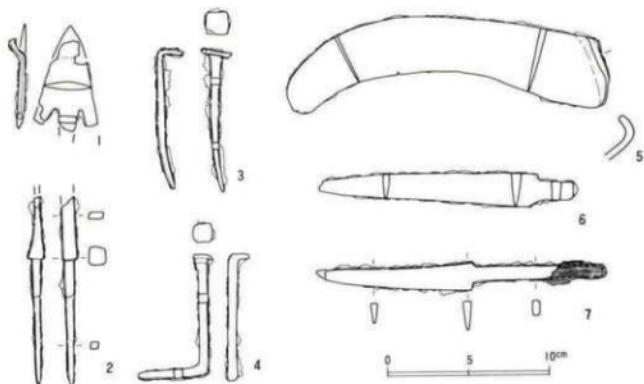
出土鉄製品

本遺跡より検出された鉄製品は、2・3号住居跡及び13号土坑の3遺構から出土している。

2号住居跡からは第10図1・2の鉄鏃2点と鍛冶壇形塚3点が検出されている。3号住居跡からは、鎌1点、刀子1点、釘1点、不明5点。鍛冶壇形塚2点の合計11点が検出されている。また、13号土坑床直では第10図7の刀子が1点検出している。

No.	出土位置	製品名	遺存状態	現存計測数値(cm)			(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
1 2号住居面 No.11	鐵	基部欠損	5.5	根 茎	2.9 1.1	0.4	16	
2 2号住居面 No.12	鐵	先端欠損	11.7	根 茎	1.0 0.4	跳械 茎	1.0 0.4	14
3 3号住居面 No.16	釘	完 存	8.7	皿 幹部	1.4 0.5	皿部 幹部	0.3 0.5	10
4 3号住居面 No.16	不明		7.9	皿 幹部	1.2 0.6	皿部 幹部	0.3 0.6	16
5 3号住居面 No.17	鍼	完 存	19.8		4		0.36	106 基礎部に折り返しを有する 床直で出土
6 3号住居面 No.17	刀子	完 存	身 茎	13.8 2.2	身 茎	2.0 1.1	0.6	43
7 13号 土坑	刀子	完 存	身 茎	9.3 8	身 茎	1.8 1.0	0.5	31 床よりやや浮いて出土

第5表 出土鉄製品観察表



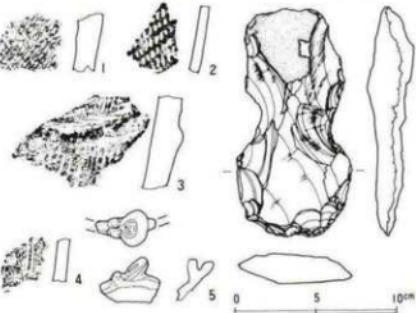
第10図 出土鉄製品実測図

その他の時代

縄文時代 本遺跡の縄文時代の遺構は1~12・15号土坑がそれにあたる。土坑内からの遺物は非常に少なく、打製石斧、石鎌各々1点が検出されただけである。遺跡の性格は土坑群であり、下図の5点が包含層内出土土器である。1は纖維を含有する。縄文前期。2は圧痕縄文である。3は口縁下部で隆帯により区画され、棒状工具により棱杉文状の文様を施している。4は無文に半截竹管による平行沈線を垂下させている。3・4は縄文中期、5は口縁部装飾突起である。縄文後期。6は打製石斧である。本遺跡における出土土器は微量であるが、出土石器はそれよりやや多い。石器総数は38点である。石器種類内訳は、石鎌1点、打製石斧3点、削器3点、凹石1点、不定形石器3点、剥片27点である。

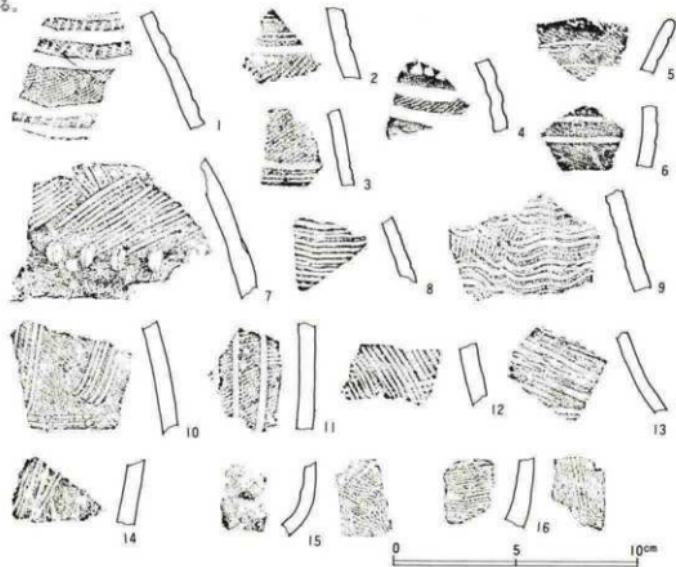
弥生時代 本遺跡において弥生時代の遺構は確認されなかったが、包含層内出土土器のほとんどが第12図の弥生中期の土器群である。

1~4は頭部から肩にかけての破片である。1は細かな羽状縄文を地文に深い横走沈線で文様構成し、沈線間に刺突を施している。2・3は縄文を地文に浅い横位沈線を有する。4は細かな縄文を地文に深い沈線区画を行ない三角刺突を



第11図 縄文土器拓影図及び石器実測図

施している。5は反撲の縄文R|Rを地文に横位沈線文を有する口縁部である。6は無文に横位沈線を有する。7は6本単位の工具により荒い羽状文を施され、その直下に指ツメ先による刺突文が等間隔に施されている。8・10は細かい刷毛目を地文に8は横位沈線、10は4本目櫛歯による斜方向のカキ目がありその下に横走する等間隔止めの簾状文を施している。9・11は縄文を地文に粗い櫛歯状工具による波状文が横走する。11は棒状工具により4本垂下する沈線が施してある。12・13・14は条痕である。12の条痕は工具が一定した整ったものを使用している。13の条痕は頭部よりでは斜方向、肩部では横方向の条痕が施されている。15・16は表裏条痕文土器である。



第12図 弥生土器拓影図

おわりに

本年度の発掘調査により平安時代の住居跡等が確認されたことから従来いわれた縄文時代の遺跡は本遺跡扇状地より高い台地であることが予想される。来年度において引き続き同地域の発掘調査が行われるため発掘調査報告書はその終了後出すことにし、今回は概要報告とした。

発掘調査及び概要報告書作成にあたり、御支援、御助言をいただいた関係諸機関、関係者各位に深く感謝の意を表する次第である。



五十嵐遺跡 遠景



五十嵐遺跡 発掘調査区

図版 I

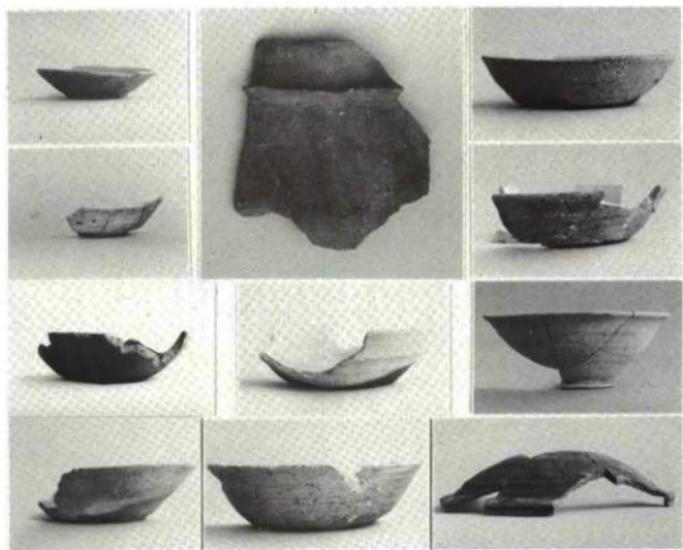
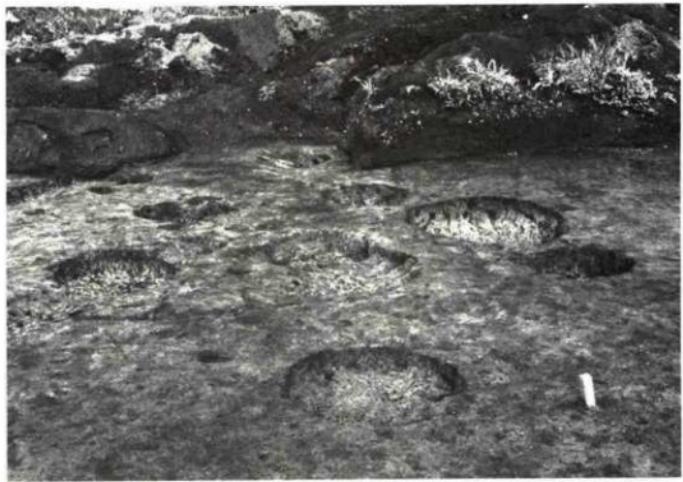


2号住居跡



3号住居跡

図版 2



上：土坑群 下：2号住居跡・3号住居跡出土土器

図版3



出土遺物（遺物集中区・その他の遺物・鉄製品・その他の時代）

図版 4

大塚遺跡群五十嵐遺跡発掘調査概報

印刷 昭和60年3月30日

発行 昭和60年3月30日

編集 群馬県吾妻郡中之条町教育委員会社会教育課
発行 群馬県吾妻郡中之条町教育委員会

〒377-04 吾妻郡中之条町大字中之条町1091

電話 0279-75-2111

印刷 小 池 印 刷